

## 峨山禅師の御業績：檀信徒との関係について

著者	尾? 正善
雑誌名	鶴見大学仏教文化研究所紀要
号	21
ページ	11-30
発行年	2016-03
URL	<a href="http://doi.org/10.24791/00000336">http://doi.org/10.24791/00000336</a>



# 峨山禪師の御業績 — 檀信徒との関係について —

鶴見大学仏教文化研究所客員研究員 尾崎 正善

## はじめに

峨山韶碩禪師（一二七六～一三六六）は、總持寺を磐山禪師（一二六四～一三二五）から引き継ぎ二代目となり、その発展の基礎を構築し、曹洞宗教団全国展開への足掛かりを築いた禪師である。初期總持寺において四二年間という長きにわたり住持を務め、伽藍を整備し、運営の仕組みを制定し、多くの弟子を指導したことは改めて述べるまでもないであろう。

後に曹洞宗は全国へ展開してゆくが、その原動力となったの言うまでもなく、峨山禪師が總持寺において指導・育成した多くの弟子達であった。

以上のように峨山禪師は、總持寺において曹洞禪を宣揚し、弟子の育成、そして寺院運営のための輪任制度などを確立したのであるが、そうした長年の活動を支えたのは地元の檀越・外護者である。本論では、そうした人々との関係がどの様なものであったかを明らかにしてみたい。

## 一、峨山禪師の伝記と業績

まず最初に、峨山禪師の業績について、そのポイントとなる点を確認しておく。

①總持寺住持、四十二年間。總持寺の基礎を作る。

② 弟子の教化。五哲・二十五哲、さらに多くの弟子達を指導する。

③ 輪住制度の確立。峨山禪師亡き後の總持寺の運営方法を制定。他の末寺にも反映。

④ 永光寺と總持寺の兼帯。寺院運営の手腕。

さらに禪師の業績は、『山雲海月』に見られる、禅思想の宣揚という側面もある。

本題に則して見ると、寺院運営と弟子の育成が大きな柱となる。これが、中世以降、特に江戸時代になり曹洞宗教団が大きく全国に発展する原動力となった。弟子を育て全国に送り出し、さらに輪住制度という形で總持寺を護持発展させて行く基礎が、教団発展を推し進めたのである。

そうした教化活動及び伽藍整備・寺院の護持を行うには、どうしても寺院を運営して行くという経営的な側面が必要となる。譬え優れた能力を持った指導者であったとしても、周囲の協力・援助がなければ一人では何も出来ないのが現実である。峨山禪師の置かれた状況も同様のものがあつたと考えられる。總持寺を運営して行く支えとなつた、地元の檀越、外護者との関係はどの様なものであつたのか。本論では、そのような点について確認してみたい。峨山禪師の詳しい伝記については、他の論文に譲るが、その略歴だけ記しておく。

### 【峨山韶碩禪師略伝】

建治二年（一二七六）

一

能登羽咋郡瓜生田に生まれる。（一説には建治元年）

出身は、源氏。（一説には、岡部六弥太忠澄の子孫）

正応四年（一二九一）

一六

叡山延暦寺で菩薩戒を受け、講師円宗に就く。

永仁五年（一二九七）

二二

冬、瑩山禪師に京都で相見す。（一説には加賀大乘寺）

正安元年（一二九九）

二四

春、再び大乘寺に瑩山禪師を訪ね、衣を改め禪門に帰投す。

三年（一三〇一）	二六	十二月二十三日、両箇の月の問答で悟道し、瑩山禪師の印可を受く。
徳治元年（一三〇六）	三一	師の命により、諸法遍歴の途に着く。（一説には、入元）
正和二年（一三三三）	三八	瑩山禪師、能登酒井保の地を寄進される（永光寺）。
元亨元年（一三三一）	四六	二月一日、瑩山禪師より、永光寺妙莊嚴院にて「戒脈」及び『仏祖正伝菩薩戒作法』一卷を、明峰とともに受く。
		七月二十二日、瑩山禪師、定賢より、諸嶽寺観音堂を寄進される。
		十一月二十五日、永光寺首座に任じられ、乗払を行う。
正中元年（一三三四）	四九	五月十六日、永光寺首座、大衆二十名と總持寺僧堂の開堂式に向かう。
		同月二十九日、總持寺僧堂開單式を行う。
		七月七日、瑩山禪師より總持寺住職に請せられ、拄杖・扠子・法衣などを受く。
		（一説には、元亨二年。また八月七日とも）
正中二年（一三三五）	五〇	授戒会・転読大般若祈禱会を行う（總持寺二世・吉事の法要）
		八月、瑩山禪師より自賛の頂相を授けられる。
		八月十五日、瑩山禪師、永光寺にて示寂（六二歳）
建武元年（一三三四）	五九	無底良韶（一三一三〜一三六一）、参じて得度し、菩薩戒を受く。
暦応三年（一三四〇）	六五	一月一日、足利直義、仏舍利一粒を永光寺に寄せる。（一説には、暦応元年十二月）
		三月六日、足利尊氏、若部保の地頭職を永光寺に寄進する。
		この年、永光寺に董住す。永光寺廊院・浄住寺東司造立。
四年（一三四一）	六六	無底良韶、總持寺の峨山の下で入室嗣法す。

この年、永光寺を退き總持寺へ歸る。

康永三年（一三四四） 六九

五月、月泉良印（一三二九〜一四〇〇）、入室嗣法す。

再び永光寺に輪住し五月二日、寺内に塔を造立す。

貞和二年（一三四六） 七一

源翁心昭（一三二九〜一四〇〇）が總持寺来參。

五年（一三四九） 七四

太源宗真（？〜一三七二）、入室嗣法す。

文和元年（一三五二） 七七

この春、通玄寂靈（一三二二〜一三九一）が總持寺に參ず。

四年（一三五五） 八〇

無底良韶を永光寺住職に招請する書状を正法寺へ送る。

道叟道愛（？〜一三七九）、入室嗣法す。

延文元年（一三五六） 八一

通幻寂靈、入室嗣法し、『仏祖正伝菩薩戒作法』を授く。

三年（一三五八） 八三

十一月四日、左衛門尉信氏より、能登禰比莊内保村の田地を總持寺に寄進される。

貞治元年（一三六二） 八七

二月九日、總持寺未來住持職補佐の規を定む。

二年（一三六三） 八八

三度、永光寺に董住す。（八月二十八日、永平寺拜登・峨山石）  
無外円照（一三一〜一三八一）、總持寺に来參す。

三年（一三六四） 八九

總持寺住持職の次第を定める。

この年、会下の上足に垂誨す。（この記録が『山雲海月』となる）

五年（一三六六） 九一

八月三日、法嗣、及び伝戒の弟子、二十八人の次第を定める。

十月二十日、示寂。（異説に、貞治四年十月二十日説。同年十月二十四日説。

貞治二年十月二十日説あり）

以上のように、十六歳で出家し比叡山で修行した後、二十四歳の時に大乘寺の瑩山禪師のもとに行き弟子入りした。その後、四十九歳で總持寺を譲られ第二代となり、九十一歳で示寂した。当時としては、大変な高齢であった。このように總持寺を四十九歳で譲られた後、四十二年間にわたり住職の位にあり、護持発展、弟子の育成に努められた。四十二年と、口でいうのは簡単であるが、現代に当てはめても大変長期の住持職と言わねばならない。後に述べる輪住制や永光寺と異なり、他にその位を譲ることなく、遷化するまでの一代、不動の位に就いていた。また、その教化の姿勢は、他の地域に足を運び、多くの寺院を建立するという様な積極的なものではなく、ひたすら總持寺、そして永光寺を護るということに終始している。

さらに弟子に関して、無底良韶・月泉良印・源翁心昭・太源宗真・通玄寂靈という名前が挙がっているが、これらの弟子が、一度に峨山禪師の下で修行していたわけではない。

また弟子は、五哲・二十五哲に限られたものではない。実際の弟子の数に関しては、他の資料を見ると二十八人説、二十九人説もしくは三十人説と、いくつかの記述がある。<sup>(2)</sup> また、峨山禪師の葬儀関係の記録である、「峨山韶碩禪師喪記」「峨山韶碩遺物配分状」などには、それまでの弟子の名簿には挙がってこない名前も記載されている。<sup>(3)</sup> 当然ではあるが、これらのことより弟子の数は、一般に言われる二十五人に限られるものではなく、それ以上の弟子がいたと想像できる。四二年間では、少なくとも倍、もしくは三倍から四倍の弟子がいたと想像できるが、それが一度期でなかったとして總持寺の隆盛は大変なものであったと考えられる。

次に輪住制度確立の条件である。輪住制度は、簡単に言えば優秀な弟子が交替で寺院を護って行くという制度である。さらに、寺院運営上の問題が生じたときには、合議によってそれを解決するように指示されている。この制度を運営して行くには、一定数以上の優れた弟子がいること、さらにその弟子達が次世代以降の弟子を育てて行くという条件が必要である。少なくとも峨山禪師亡き後を嗣ぐ、第二世代の人員が確保されなければ円滑な運用は望めない。

そのように、後事を託すに足るべき優れた多くの弟子を育てることが峨山禅師にとつては大切だったのであるが、そのためには何が必要だったのであろうか。

## 一、瑩山禅師と總持寺

總持寺を開かれたのは瑩山禅師であるが、その瑩山禅師と總持寺の関係はいつたいどのようであったか、『観音堂縁起』(總持寺中興縁起)<sup>(4)</sup>・『洞谷記』などの記録から確認してみたい。

### 【瑩山禅師と總持寺関係年譜】

元亨元年 (一三三二)

四月二十三日

永光寺方丈にて諸岳観音堂の瑞夢を見る。

五月中旬

諸嶽観音堂・定賢律師の要請。中興開山として観音堂入寺。

六月十五日

本尊の観音菩薩の夢を見て、山門建立の願を発する。

六月十七日

『観音堂縁起』(總持寺中興縁起)を撰す。<sup>(5)</sup>

十一月二十五日

峨山、永光寺首座に任じられ、乗払を行う。<sup>(6)</sup>

元亨二年 (一三三三)

四月三日

永光寺仏殿の建設開始。<sup>(7)</sup>

六月十八日

永光寺勝蓮峰に円通院を建立。「円通院縁起」を撰す。<sup>(8)</sup>

八月八日

永光寺仏殿に棟木を置く(上棟式)。

十月九日

永光寺・大乘寺・總持寺などの住持職の置文を撰す。<sup>(9)</sup>

元亨三年 (一三三三)

五月十六日

永光寺峨山首座、大衆二〇名と總持寺僧堂の開堂式に向かう。<sup>(10)</sup>

五月二十九日

總持寺僧堂開堂式を行う。

七月七日

峨山、總持寺住職に請せられる。

七月十二日

永光寺へ歸山

正中二年  
(一三三二—一三五)

八月十五日

永光寺にて示寂(六二歳)

以上記載したように瑩山禪師は、元亨元年四月二十三日、羽咋の永光寺において瑞夢を見た。そして一月後の五月の中旬、その瑞夢で見た諸岳寺、後に山号の由来となる諸岳寺の觀音堂を定賢律師から譲られ、その中興開山として迎えられて入寺した。後に諸嶽山總持寺と改めた。

そして六月に『觀音堂緣起』(總持寺中興緣起)を著し、ここに總持寺としての歴史が始まったのである。

元亨三年十月には、永光寺・大乘寺・總持寺などの八カ寺の住持職の置文<sup>(1)</sup>を撰しているが、これについては後述する。寺を譲り受けて三年後の正中元年五月十六日、永光寺から瑩山禪師と共に峨山首座並びに大衆二十名が總持寺僧堂の開堂式に向かい、二十九日に開堂式を行った。その二ヶ月後の七月七日に瑩山禪師は、峨山禪師に住職を譲り、十二日には永光寺に歸山している。そして、その翌年の正中二年八月、永光寺にて六十二歳の生涯を閉じられた。

以上、禪師の年譜を確認すれば分かるように、師が總持寺に関わったのは足掛け四年、正確には丸三年ということになる。

またその間の行状を見ると、元亨元年十一月には、峨山禪師は永光寺の首座に任じられ兼弘を行っており、この時期冬安居を永光寺で行っていたことが確認できる。さらに、その翌年四月には、永光寺の仏殿の建築を開始している。続いて、六月には、勝蓮峰に円通院を建立している。そして八月には、永光寺仏殿の上棟式を行うという様に、永光寺の伽藍整備が、段階的に行われていたことが分かる。つまり、瑩山禪師が、自身で実際に總持寺に足を運び、造営、運営に直接関わる時間はなかなか割けなかつたと想像される。そのように仮定すると、弟子である峨山禪師が



この段階から總持寺の運営に大きく関わっていたのではないかと想定されるのである。

いずれにせよ瑩山禪師が總持寺に与えた影響は、その住持期間も含めて極めて限定的でなかったかと考えられるのである。

さて、總持寺の初期の段階、瑩山禪師が譲り受けた段階の總持寺の現状に関しては、先に挙げた置文の中に著されている。それは以下の様な内容である。

瑩山禪師『洞谷記』「山僧遺跡寺寺置文記<sup>(12)</sup>之」

一、洞谷山者、嗣法人人連続、而可住持興行。頗是五老遺跡之際、諸山之中、可崇重事、置文委之。

(中略)

一、總持寺者、当国第三之僧所也。檀那雖未正信、本院主定賢律師、為永代伽藍興隆為僧所、其志不可捨之。門徒中可住持興行所也。

右八箇寺者、瑩山修練、而門徒令相承寺也。永代守門風、可練行修持之置文如件。

元亨三年〈癸亥〉十月九日 洞谷開山紹瑾〈御判〉

途中略したが、これは元亨三年十月九日に瑩山禪師が、能登・加賀地域の瑩山禪師所縁の洞谷山（永光寺）・山内円通院・宝応寺・光孝寺・放生寺・浄住寺・大乘寺、總持寺の八カ寺に対する置文である。この置文の内容は、八カ寺の今後の運営の方針、住持の心得、諸注意である。

一番目が、「洞谷山」とある。これは、瑩山禪師にとって第一と言える寺院、永光寺であり、最初に記している。

途中略した部分の書き出しは、「山中円通院は、瑩山今生の祖母、明智優婆夷の為に之を建立する所なり」「加州

宝応寺は、瑩山今生の悲母、懷觀大師の為に建立する所の尼寺なり」「光孝寺は、当国最初の独任の所なり」「放生寺は、加州第三の僧所、門徒宿老の休息の所なり」「加州、淨住寺者、本願の素意、清淨寄進の僧所の間、素意に任せて、了閑上座が為に、修練勤行せしむ」「大乘寺は、先師開法の加州第一の貴寺なり」とあり、それぞれの特徴を最初に記している。

そして最後の八番目が總持寺である。その書き出しは、「總持寺は当国第三の僧所なり」と、ある。続いて、「檀越、未だ正信ならざると雖も、本院主定賢律師、永代伽藍興隆の為に僧所と為す。其の志、之を捨つ可からず。門徒の中、住持興行すべき所なり」と、記す。

これをどう読むかという点、まず、檀越、未だ正信ならずと記されるように、当時はまだ檀那の理解と大きな帰依を受けていなかったと思われる。定賢律師が總持寺を譲るというのは、本人が運営をするのはなかなか難しいという現実があったであろう。そうした時、瑩山禪師の名声を聞き、師に譲ったと考えられる。また、その仲介者は地元の地頭職であったという説もある。

寺を譲り受けた瑩山禪師は、定賢律師の志を捨ててはならず、門弟の間で住持職を勤め、興隆すべきと厳命しているが、他の寺院に比べると自身の積極的な関与は窺えない。

この置文からは、帰依する信者や檀越も少なく、その時点で外護者も現れるか心配な状態ではなかったか、と推察される。これが、總持寺が置かれていた当時の状況である。

### 三、峨山禪師と儀礼

さて、峨山禪師は様々な儀礼・法要を行っていたことが確認されている。それは修行僧に対してだけでなく、本論で問題としている檀信徒との関係においても確認できる。

まず、總持寺晋住時の法要について、『洞谷記』の記述を見てみよう。

七月七日、惣持寺住持職、讓与碩首座峨山老。法衣開堂着、用拄杖・扨子・戒策同付囑。即日 新命、始東

堂相看時、興聖三尺竹篋、（鉄尺定三尺二寸）、日本最初入室、竹篋付授之。

三日間、吉事連続、七日夜、受戒人、十五人、四部衆調、出家数多。

八日、又受戒者、十三人、是四部調。

九日、大般若入寺。

十日、新命以下衆僧転読、洞谷開題委曲宣説般若。

十二日、歸寺。<sup>(13)</sup>

まず、正中元年七月七日、瑩山禪師は總持寺住持職を峨山禪師に譲ったことが記される。その次、「三日間、吉事連続」とあり、晋山関係の法要を三日間続けて行った事が分かる。その次、「三日間、吉事連続」とあり、晋山関係の法要を三日間続けて行った事が分かる。

その法要とは、まず、住持職を譲られた七日に、授戒の者が十五人いて、四部衆が揃ったとあり、翌八日には、また授戒の者が十三人いたと記される。これにより、吉事の法要として授戒会が行われていたことが分かる。

授戒の者十五名と十三名というのは、当時としては多いのではなからうか。道元禪師も瑩山禪師も多くの人々に対して授戒をしたことが知られている。それを受け継いだ峨山禪師の布教化の一面が認められる。

次に、翌九日、『大般若』が寺に入り、十日に新命以下の衆僧が転読し、そして洞谷が開題し、般若を宣説した、とある。言うまでもなく、「洞谷」というのは洞谷山永光寺のこと、瑩山禪師が『大般若』を宣説したということである。このように峨山禪師の転読大般若による祈祷、瑩山禪師が般若の教えを説き示すという、師弟の法要及び教

示が行なわれたのである。

因みに、十二日歸寺とあるのは、瑩山禪師が永光寺へ歸山したこと指す。

現在、總持寺では、毎朝転読大般若を勤修しているが、これは峨山禪師が入寺された時点からの法要であることが分かる。

次に、『總持第二世峨山和尚行状』に次のようにある。

往々建立梵刹、処々修造招提。若夫每節上堂、或小參、或布薩、且昏商量、古人結角<sub>14</sub>訛処、為衆部拆、聳動人天。(中略)且厥受菩薩戒備弟子員者、真俗男女不可勝数矣。

ここに、「上堂、或いは小參、或いは布薩、或いは且昏商量する」とある。これらは修行僧に対する教化・指導であり、道元禪師の上堂や瑩山禪師の請益に見られる接化を、修行僧に対して熱心に行っていたことが拝察される。

さらに「菩薩戒を授ける弟子のものは真俗男女、勝てて数うべからず」とある。ここには、僧侶及び一般在家信者に対して、多くの授戒を行っていたことが認められる。

先の『洞谷記』に見られる記述を裏付けるものであるが、在家者に対して仏縁を結ぶことを盛んに行い、教化活動に熱心であった禪師の姿が確認できる。

さて、こうした在家信者に対する授戒、また大般若に見られる祈祷は、地域の人人々に大きな影響を与えたと考えられる。このような在家者との関係が、總持寺を護持発展させていく基盤、経済的な援助を受ける背景になったのである。

#### 四、峨山禪師と寄進状（總持寺の經濟基盤）

先に在家者信者から經濟的な援助を受けたと、述べたがそれを示す資料を見て行こう。以下に記すのは、『總持寺誌』の史料である。

『總持寺誌』「寺領文書」（番号―『總持寺誌』通し番号）<sup>(15)</sup>

- 五〇、「対馬守鴨為寄進状」嘉曆二年（一三二七）十一月十六日
- 五一、「定賢寄進状」嘉曆四年（一三二九）二月十三日
- 五二、「總持寺雜掌禪勝申状」元弘三年（一三三三）九月
- 五三、「領家某寄進状」元弘三年（一三三三）十二月
- 五四、「地頭沙弥某寄進状」建武元年（一三三四）十一月二十日
- 五五、「地頭政所寄進状」建武二年（一三三五）三月十日
- 五六、「諸岡寺々領安堵状」建武四年（一三三七）正月十四日
- 五七、「左衛門尉平某安堵状」曆応四年（一三四一）後四月十六日
- 五八、「前右兵衛督某安堵状」文和元年（一三五二）正月十一日
- 五九、「藤原よりただ寄進状」文和三年（一三五四）六月二十五日
- 六〇、「左衛門尉信氏寄進状」延文三年（一三五八）十一月四日
- 六一、「長谷部秀連去状」康安元年（一三六一）十二月二十五日
- 六二、「のりのぶ讓状」貞治二年（一三六三）十一月十五日
- 六三、「兵庫允惟清証状」貞治三年（一三六四）十一月十一日
- 六四、「尼しゆ一寄進状」貞治四年（一三六五）三月八日

六五、「尼りやうこ寄進状」貞治四年（一二三六五）五月十五日

これらが峨山禪師が生前に受けた寄進状の一覧である。總持寺住持の後の一三二七年から示寂直前の六五年まで、『總持寺誌』の資料番号で五〇番から六五番までの十六通残っている。

その寄進の意図に関しては、後に論じるが、どれ位の面積の田畑を貰ったかということとは、正確には分からない。面積を記した箇所が残った寄進状もあるが、欠損したもの、また本来あるべき添え状がないものなど、不完全の書状が多い。

少なくともここで確認しておきたいのは、このように多くの寄進を受けていた事実である。さらに、寄進状の目録もある。

六六、「總持寺文書目録」

- 一、定賢律師当寺開山和尚請状 一通
- 一、中院殿当寺田地安堵状宣旨状 二通 内一通国宣
- 一、定賢律師峨山和尚当寺施入状 一通
- 一、中院右衛門督制札状 一通
- 一、当寺敷地四至分限之状 一通
- 一、領家寄進状 元弘三年状
- 一、中院家寄進状 一通 曆応四年状
- 一、吉見大藏大輔殿制札状 一通
- 一、仁王講田寄進状 一通
- 一、法幢院寄進状 一通 此状在無端和尚之所

- 一、今次寄進状 一通 一、定燈庵寄進状 五通（後筆か？）
  - 一、薩摩阿闍梨定賢律師讓状 一通
  - 一、長徳寺寄進状 二通 櫛比將監殿寄進状 一通
  - 一、鮎上寄進状并山号寺号
  - 一、越後常興寺文書 七通 此状皆被下越州常興寺了（後筆か？）
- 貞治五年（一二六六）丙午十二月五日 如元・純證・宗真<sup>(16)</sup>

この寄進状目録には、先に挙げた十六通と名称が異なる書状、また相互に合致しない書状も数多く記載される。単純に先の史料と比較することは困難ではあるが、少なくとも貞治五年（一二六六）、峨山禪師が亡くなられた年の十二月の時点では、目録に挙げただけの寄進状があつたのであろう。

こうした多くの寄進状に記される土地、田畑を得ることにより、修行者を養い、伽藍の整備・修復が可能になつたのである。これらの寄進地が、先に示した多くの修行僧を指導するための基盤となつたことは間違えない。

実際を考えたとき、田畑の寄進は峨山禪師にとつても非常に心強いものであつたであろう。<sup>(17)</sup>

## 五、寄進状の内容と峨山禪師

では、寄進状の内容を見てみよう。そこには、寄進者の切なる願いが書かれている。その代表的なものを挙げてみたい。

### 五〇、「対馬守鴨為寄進状」

奉寄進諸岡寺大殿若経并五部大乘経供料田事

合壹段二 本国内 在所諸岡 今介支内 坪二所

右件田地者、為本所領家并預所等之祈禱之所令寄進彼寺之供料田也。然者毎月十七日無懈怠、發信心令転読彼経等可致無二之祈請也。仍為現世安穩(後生善所)、寄進如件

嘉曆二年(二三二七)十一月十六日<sup>(18)</sup>

この「対馬守鴨為寄進状」には、諸岡寺(諸嶽寺)に『大般若経』ならびに『五部大乘経』と供料田を寄進したとある。『大般若経』は、總持寺晋山の折にも届けられており、当時の祈禱經典として重要視されていたことが窺われる。それと『五部大乘経』、供料田である。

供料田とは、「右の件の田地は、本所領家預所等の祈禱の施しむる所なり、彼の寺の供料田なり」とあるように供養を行うため経費、今でいう布施である。田を寄付することにより、そこから上がる米を布施としている。そして、「毎月十七日無懈怠」と怠ることなく転読・祈禱を要請している。

その願目は、「現世安穩、後生善所の為に寄進すること件の如し」とある。

以上、『大般若経』を寄付し、合わせて供養料として田を寄進するので、毎月十七日には必ず現世安穩・後生善所の為に祈って欲しい、と峨山禪師に要請している。

次に、五三、「領家某寄進状」を見てみよう。

寄進 諸岡寺大般若田事

合壹段者、大谷屋・小谷屋・并介支等、

右田地者、奉為聖朝安穩・天長地久、本家・領家御願成就、限永代彼寺奉寄進處也、仍為後證、依仰執達如件、



元弘三年十二月 日 領家 在判<sup>19</sup>

前半の解説は割愛するが、この「領家某寄進状」の願目はの最初には、「聖朝安穩・天長地久」とあり、政治の安定、天地の平穩を願っている。次に「本家領家、御願成就」、と本家・領家の所願が成就することを祈念している。こうした願いを背景に土地の寄進が行われたことが分かる。また、五九、「藤原よりただ寄進状」には次のようにある。

きしんたてまつる のとくにときのいん、あゆがみむらの地頭しきの内の田地の事

右かのしよりようは、よりただちうたいそうてんのしよりやうなり、しかるにこし<sup>20</sup>ようほたいのため、てんそのみたうを、ししやうかさんおしやうに、はしめてまいらせおき候により、(後略)<sup>20</sup>

ここには、藤原よりただが、重代相伝の所領を、「後生菩提の為、伝祖の御田を師匠峨山和尚」へ寄進した旨が記さる。つまり、来世の平安を願つての寄進である。

他の例もあるが、これらの寄進状から峨山禪師に期待する強い思いが窺われる。そしてそうした願いに、峨山禪師が積極的に応え、信頼を得ていたのであろう。

さらに、寄進状ではないが、「峨山韶碩禪師喪記」には、「左衛門少尉頼信」という俗人の祭文がある。<sup>21</sup>こうした葬儀に際しての祭文の例は、比較の数も少なく貴重であると同時に、こうした事が行われた関係であつたことも、再確認すべきであらう。

そこに、峨山禪師と帰依者との密なる関係が読み取れるのである。

## 六、峨山禪師の檀信徒への思い

こうした峨山禪師の姿勢は、師である瑩山禪師の教えと思いを強く引き継いでいた結果だと考えられる。『洞谷記』「当山尽未来際置文」には以下のようにある。

(前略) 依之尽未来際、瑩山嗣法小師、剃頭小師、參学小師、受具受戒、出家在家、諸門弟等、一味同心、以当山為一大事。偏奉崇敬五老峰。專可興行門風、是則瑩山尽未来際之本望也。仏言、篤信檀那、得之時、仏法不断絶、云云。又云、敬檀那可如仏、戒定慧解、皆依檀那力成就、云云。然間、瑩山今生仏法修行、依此檀越信心成就。故尽未来際、以此本願主子孫孫、可為当山大檀越大恩所。是故、師檀和合、而親作水魚昵、來際一如、而可致骨肉思。用心如此者、實是可為当山之師檀。縱使有難值難遇之事、必可生和合和睦之思。以此置文、為当山來際之龜鏡、為住持檀越之眼目。以壹通写兩通、師檀共加折目判形、一通納寺庫、一通持檀家、可為師檀相互之後鑑。檀那之崇敬此門徒之商議住持、住持之彼檀越之遺付子孫、可崇重之置文状、如件。

元応元年〈己未〉十二月八日<sup>(2)</sup>

余りに有名な一段であるので、改めて述べるまでもないであろうが、「仏の言わく、篤信の檀那、これを得るとき仏法断絶せず」「又た云く、檀那敬う事仏の如くすべし、戒定慧解、皆な檀那の力に依りて成就す」「瑩山、今生の仏法修行、此れ檀越の信心に依りて成就す」「是の故に、師檀和合、而親作水魚昵、來際一如、而可致骨肉思」と、檀越への思いを綴っている。

さらに、「一通を以て両通に写し、師檀共に折目判形を加え、一通は寺庫に納め、一通は檀家に持して、師檀相互の後鑑と為すべし。檀那は之れ此の門徒の商議、住持を崇敬し、住持、彼の檀越の遺付の子孫、崇重すべきの置文の状、件の如し」とある。ここには、具体的に書状を二通作り、一通は寺に、もう一通は檀家で持ち、そして、寺と檀家の後世の鑑とすべきこと、さらに檀信徒と住持ともに互いに尊崇・尊重すべきことが厳しく誠められている。

こうした瑩山禪師の強い誠めは、寺院の護持発展、そして教団運営からも外護者の存在とそれを大切に思う気持ち、そしてそれを弟子達へ伝えて行き、後世の指針としなければならぬ思いがあつたからに外ならない。

また、『観音堂縁起』（總持寺中興縁起）には、以下のような記述がある。

門上安放光菩薩、放光般若之意也。放光菩薩者大唐廣善寺門上之靈像也。僧形觀音地蔵二菩薩也。常放光明、而令人敬信。兩尊是同故、俱称放光菩薩。当帝后妣妊孕時、參詣祈念放光頻新、産生平安、王子誕生。

自尔以後數百年、大唐日本皇后將相、悉皆歸之、祈請産生平安。当庄妊婦可祈之。靈驗必可揭焉矣。為後鑑記之。諸人同心合力、立当寺山門、仰圓通冥応、至禱至禱。<sup>(23)</sup>

これは、『観音堂縁起』の最後の箇所であるが、門上に放光菩薩を安置した由来を記した後、「多くの檀信徒が一味同心に力を合わせ、總持寺に山門を建て、観音の利益を仰ぐべし」と書かれている。ここには、總持寺伽藍整備の思いが、檀信徒への期待と共に述べられている。こうした瑩山禪師の思いを引き継いだのが、峨山禪師であつた。

## おわりに

以上、峨山禪師と檀信徒との関係、そしてその思いは瑩山禪師の教えを引き継いだものでないかと述べて来た。

住持がいて、また多くの僧が修行することによりその寺院が発展するのではない。優れた住持を助け、また集まった修行僧を養ってもらえる経済的な基盤、その地域の外護者、檀信徒の力が必要である。そのような力は、黙って集まるものではない。

そのような力を結集する力量を峨山禪師が持っていたのである。檀信徒の期待や願いに応え、さらに人々を教化する力が有って、寄進が集まり、そして結果的に多くの弟子を育てることが出来たのである。

そうした力が、後の寺院及び教団の大きな発展の基になり、現在の曹洞宗教団があることを述べて、論を閉じたいと思う。

【注】

- (1) 峨山禪師の基本的論文史料  
伊藤道海・山田靈林『峨山禪師行実』（玄黄社・大正九年六月）  
佐藤悦成『總持寺二祖峨山禪師』（大本山總持寺出版部・平成八年一〇月）  
田島柏堂『〈総持二祖〉峨山韶碩禪師』（大法輪閣・昭和四〇年三月）  
佃和雄『峨山禪師物語』（北國新聞社出版局・平成一四年六月）  
松田陽志『峨山和尚山雲海月』、『解説』、『訓註曹洞宗禪語録全書』中世篇三（四季社・平成一六年八月）  
山端昭道『峨山禪師と大本山總持寺』、『曹洞宗教義法話大系』六（同朋舎出版・平成二年六月）  
拙稿「峨山韶碩禪師の御遺徳 六五〇回大遠忌にむけて」（『鶴見大学仏教文化研究所紀要』二〇号・平成二七年三月）
- (2) 栗山泰音『總持寺史』五二三頁（大本山總持寺・昭和一三年三月）、『新修門前町史』「資料編2」二二五頁。
- (3) 『統曹洞宗全書』「清規・講式」「喪記集」一八・二三頁、『新修門前町史』「資料編2」二一・二三頁。
- (4) 横関了胤『總持寺誌』（大本山總持寺・昭和四〇年三月）五八三頁、『新修門前町史』「資料編2」一一頁。
- (5) 『總持寺誌』五八三頁、『新修門前町史』「資料編2」一一頁。

- (6) 『瑩山禪』(山喜房仏書林・平成元年) 卷八・五四頁。
- (7) 『瑩山禪』 卷八・九九頁。
- (8) 『瑩山禪』 卷八・八八頁。
- (9) 『瑩山禪』 卷八・一七一頁。
- (10) 『瑩山禪』 卷八・二七〇頁。
- (11) 『瑩山禪』 卷八・一七一頁。
- (12) 『瑩山禪』 卷八・一七一頁。
- (13) 『瑩山禪』 卷八・二七〇頁。
- (14) 「『山雲海月』研究序説」、『曹洞宗宗学研究所紀要』 一二号・一九九八年、一三〇頁。
- (15) 『總持寺誌』 五九八頁。
- (16) 『總持寺誌』 六〇三頁、『新修門前町史』 「資料編2」 二二八頁
- (17) なお、總持寺の外護者・寄進状に関しては、佃和雄前掲書、九「總持寺の基盤確立」 六〇頁、十四「入寂と葬儀」 一四三頁にも詳しい。
- (18) 『總持寺誌』 五九八頁。
- (19) 『總持寺誌』 五九九頁。
- (20) 『總持寺誌』 六〇一頁、『新修門前町史』 「資料編2」 一八頁。
- (21) 『統曹洞宗全書』 「清規・講式」 「喪記集」 二二頁。
- (22) 『瑩山禪』 卷八・一八二頁。
- (23) 『總持寺誌』 五八三頁、『新修門前町史』 「資料編2」 一一頁。

【付記】 本論は、二十七年六月十三日に行われたシンポジウムの発表原稿に、当日読み上げられなかった資料及びコメントを加筆ものである。引用資料の増補などはあるが、内容の概要は大きく異なるものではない。